



序 文

阿波学会会長 小林 勝 美

平成20年度の阿波学会総合学術調査は美馬市美馬町で行い、昨年度の同市木屋平に続き、美馬市での二年連続の実施となりました。美馬町は国史跡指定の段ノ塚穴（昭和17年）、郡里廃寺跡（昭和51年）及び、国の登録有形文化財、青木家住宅（平成10年）、願勝寺山門（平成20年）があり、その他、県指定・市指定の文化財を含めれば、町全体が文化財の宝庫となっています。

私も大学時代に考古学を専攻し、県内の遺跡探訪をはじめるとに当たり、最初に訪れた町が美馬町でした。段の塚穴や、立光寺跡（現郡里廃寺跡）を見学後、願勝寺の郷土館（現美馬郷土博物館）に立ち寄り、前住職の津田快洞先生より、大量の展示遺物についての詳しい説明をいただき感動をいたしました。その後、卒業論文で再訪し、須恵器・土師器等の実測調査や写真撮影をさせていただき、今日に至る研究活動の出発点が美馬町にあったことを懐かしく思い出しております。

本年度の総合学術調査は8月1日に結団式を開催し、8月10日までを中心に実施されました。18班（学会）80余名の会員が現地調査を実施し、中には春夏秋冬の四季の変化にあわせて調査を継続する班もあり、その調査姿勢には頭の下がる思いをしております。美馬市や美馬町では昔から文化財に関心の深い先人達が多く輩出され、現在も郡里廃寺跡の整備事業が進行中であるなど、住民の文化への意識は高いものがあります。そして、将来は阿讃山麓と吉野川中流域を背景とした文化の中心地として発展が期待されている地域でもあり、充実した調査・報告が期待されました。

一方、阿波学会の総合学術調査は県の行財政改革に伴う緊急事態で、補助金が削減され、実施が危ぶまれる状況となっており、実施計画は一年一年の状態となっています。しかし、私達が目指している県下50市町村（昭和の大合併）の現地調査を丁寧に実施し、研究紀要を完成させ、集大成することが、学会員の悲願です。それゆえ、学術調査では各市町村の現状課題を構造的に解明し、今日の問題点を個々に鮮明にし、地域住民に問い掛ける調査を推進しています。しかし、多くの会員は職業を持っており、休祝日を利用してのフィールド調査は、一人ひとりの使命感や責任感がなければ達成されません。したがって、その調査姿勢は地域の文化や文化財への厳しい目となり、研究者としての感性を磨く機会ともなっています。また、若い会員の育成のために、現地調査指導を徹底している活動を垣間見るにつけ、阿波学会は中長期的展望の中で、継続させなければならないと痛感をしています。この調査は全国的にもオンリーワンで、「文化立県とくしま」の推進そのものであると思っています。

最後になりましたが、美馬町総合学術調査のため、行政面で多大なご協力を賜りました美馬市・牧田久市長様はじめ、市議会・教育委員会の方々にお礼を申し上げます。特に市教委生涯学習課の課長様、課員の方々には、地元交渉や連絡及び会場設営等々で、行き届いた支援体制をいただき、充実した実り多い学術調査になりましたことに心から感謝申し上げます。